

# 女性自立・収入向上

相田 陽子

4年半ぶりの現地訪問。発展と呼ぶには私にはためらいがあるが、道路の拡張・舗装、新しい建物、ファストフード店の増加。変貌ぶりには目を見張った。なかでもナバルタビとCOWHEDは対象的だった。

## ビラーンの伝統織物 ナバルタビの復活

アムグオを10年前に訪問した時は、バイクの後ろに乗り、舗装されていない山道に行くのはかなり辛かった。しかし今回はポロモロック中心部からしばらく行くと、ドールのパイナップル・プランテーションの間を抜ける道は埃っぽかったが、それを過ぎると、また舗装された道に入り、急な道ではあったが、「伝統技能振興組織センター」へ1時間ほどで到着した。



センターは6畳ほどの広さで、唯一の男性研修修了生アルフレッドが防染の括りを熱心に行っていた。アルフレッドはデザイン担当だそうだ。ここでは1人の織り手が全ての工程を行うのでは無く、分業体制を取っているとの事。



仕上げた織を見て嬉しかったのは、ビラーン本来の織になっていたことである。以前支援したナバルタビプロダクションでの講習の講師はレイクセブ出身で、ティナラクを習得した人なので、模様がティナラク風で、私としては正直「ビラーンの織は途絶えた」と悲観していた。理由は、初めてアムグオを訪れ、大事にしまわれていた織を見せてもらった時の感動が忘れられないからであった。ティナラクとは違う模様で、艶は無いが、素朴で丁寧に織られた様子が感じられた。

代表のジャオは、熟練織り手のおばあさんを見て育ち、ナバルタビの美がわかっているのである。また販売に関しても、積極的に見本市へ出展しており、ネット通販で販路拡大を図っている。



マロン用の織物は、以前は織り上げた布を250ペソ払ってマロンに仕立ててもらい、千ペソで売っていたが、研修後は全て組合員で縫っている。ビーズのジャケットもダーツの入れ方が洗練されている。



傾斜地に植えたアバカも順調に育っていた。今後は、センターから3km程離れた道路側面の傾斜地の入会地(いりあいち)に、アバカ栽培の事業支援を希望している。

## COWHEDの理念存続と今後の対策は

2007年に完成した「伝統の家」は、屋根のニッパヤシはだいぶ前からトタンに替えられ、竹の壁は既に古びて、完成時の湖面を背景に異彩を放っていた面影は何もなかった。以前は「伝統の家」の前を歩いていた人々が中に入ってきたが、今は個人でも車で来る観光客が増え、ただの古い家としか見えないので素通りする。私の2時間程の滞在中1人しか入ってこなかった。

競合店が増え、買ったたいて安く販売しているので、COWHEDの製品が割高に思われてしまい、販売が伸び悩んでいる。役員会ではスタッフの刷新を模索しているようであるが、現在のスタッフは、自分たちが運営を支えていると自負している。新たな経営戦略が必要だろうが、組合としての理念を維持しつつ、可能な道は何なのか、難しい課題に直面している。



メガネチェーンのフックを付けているマリア

上記報告の補足と前号の人名修正：相田さんは10年前、当団体現地事務所ボランティアとしてミンダナオに滞在の折、ビラーンの村アムグオで継承されているナバルタビ織に出会い、「織の家」建設にも立ち会いました。しかし、上述のように、数年前のナバルタビプロダクション(代表・スヌーリア)に研修講師として招かれたのは、ティナラク織の影響を受けた中堅織手ソーニャさんでした。

<人名修正> 前号 P5 右上写真で、アムグオのリーダーをジェロとしたのはジャオの誤りです。訂正してお詫びいたします。(事務局)